毎日新聞
2017年(平成29年)12月13日(水)　奈良

やまと万葉がたり

さし鍋に湯沸かせ子ども　櫟津の檜橋より来む狐に浴むさむ

長意吉麻呂　巻十六・三八二四

年の瀬の迫るこの時期には、宴会に出席する機会が増える方も多いのではないでしょうか。今回の歌は、古代の宴会における一首です。

この歌、一体何を意図しているのかは歌だけではよくわかりません。この歌の詠まれた状況などを解説する左注によると、「ある時多くの人々が集って宴会をしていた。その時、ま夜中になって狐の声が聞こえて来た。そこで皆が意吉麻呂にすすめて、『この饌具、雑器、狐の声、河、橋などの物について、ちょっと歌を作ってみよ』と言った。するとすぐに声に応じてこの歌を作った」と伝えられています。ここでの「饌具」とは食器のことで「さし鍋」(柄のついた鍋)を指し、「雑器」は「櫃」と「箸」を指します。「櫃」は「櫟津」の「ヒツ」に、「箸」は「橋」にかけて詠まれており、これらは宴席に用意されていた食器類であったと考えられています。さらに、「来む」には狐の鳴き声の「コン」がかけられています。そう、この歌は即興の駄洒落でできあがっているのです。

作者の長意吉麻呂は即興で歌を詠む名人だったようで、他にも宴会での即興詠と思われる歌を数首残しています。宴も夜中になると眠気が交じり、中だるみしてくるものです。そんな時、彼のような芸達者が登場すると、場は一気に盛り上がったことでしょう。私はひそかに、彼のことを「古代の宴会部長」と呼んでいます。

即興で歌を作るということは、大変な技術を要します。その上、複数のお題を巧みに詠みこみ、洒落をきかせて意味の通る一首に仕立てるというのは、ほとんど神業に近い領域です。意吉麻呂の歌を読むと、古代の人々のにぎやかな宴の声が聞こえてくるような気持ちになります。芸達者が宴会でもてはやされるのは、いつの世も変わらないようですね。

(県立万葉文化館研究員・大谷歩)

【訳】さし鍋に湯を沸かせよ、皆さん。櫟津の檜橋から来る狐に湯をかけてやろう。

※「櫟津」は櫟本や櫟枝町付近とされるが不明。「津」は川の船着場。

=次回は1月10日